

サッピオネータのパラッツォ・ドゥカーレにおける「祖先のガッレリア」 —ヴェスパシアーノ・ゴンザーガ・コロナの肖像ギャラリー構想—

望月 由美子

札幌市立大学デザイン学部*

抄録：本稿は、初代サッピオネータ公爵ヴェスパシアーノ・ゴンザーガ・コロナ（1531-91）が居城であるパラッツォ・ドゥカーレ（公爵の宮殿）に造営した肖像ギャラリーについて検証するものである。ヴェスパシアーノは北イタリアのロンバルディア州で勢力を誇ったゴンザーガ家³³⁾³⁴⁾の傍系貴族で、星形の要塞都市サッピオネータを造営した人物として知られる。また、学術文芸の庇護者、スペイン王フェリペ二世の傭兵隊長としても名声を馳せ、歴代神聖ローマ皇帝の愛顧を受けて地方領主の身分から公爵まで登りつめた人物でもある。本論は、サッピオネータのパラッツォ・ドゥカーレにヴェスパシアーノが設けた「祖先のガッレリア」（ガッレリアは「美術品展示室」「ギャラリー」の意）と呼ばれるゴンザーガ家祖先の肖像を飾った部屋の室内装飾プログラムを分析するものである。その際、16世紀から18世紀の宮廷文化で重要な側面を担った肖像ギャラリーの機能に配慮しつつ、壁面の祖先たちの肖像群と天井フレスコ画のオリンポスの神々、古代ローマ帝国主題を図像学・考古天文学的視座から検討し、最終的にここがヴェスパシアーノの政治支配の正当性と、サッピオネータのゴンザーガ家による支配の永遠性を祈念する意図から構想された一室であったことを明らかにするものである。

キーワード：ヴェスパシアーノ・ゴンザーガ・コロナ サッピオネータ ガッレリア 肖像

Essay on the Galleria degli Antenati in the Palazzo Ducale in Sabbioneta: The concept of the portrait gallery of Vespasiano Gonzaga Colonna

Yumiko Mochizuki

School of Design, Sapporo City University

Abstract: This article examines the portrait gallery as the visual propaganda used by Vespasiano Gonzaga Colonna(1531-91), the 1st Duke of Sabbioneta and a member of a cadet branch of the House of Gonzaga, Dukes of Mantua in Northern Italy. He was known not only as the condottiero of King Philip II of Spain but also as an eminent patron of the arts and founder of the Ideal City of Sabbioneta. After a brief consideration of the terms(palazzo, galleria), an analysis of the decorations and architectural features of the Galleria degli Antenati(Gallery of the Ancestors) in the Ducal Palace will be used to verify the function and meaning of the Prince's concept from an iconographical point of view. An synthetic analysis of the walls which are decorated with 21 plaster portraits of the Gonzaga family (from the first Capitano of Mantua, Luigi Gonzaga, to another Luigi, the heir of Vespasiano), the ceiling painted the figure of Apollo holding a scroll which is written the ode to the Gonzaga family, the layout of the Galleria reveals that this space was conceived to glorify the family branch living in Sabbioneta and the reign of Vespasiano.

Keywords: Vespasiano Gonzaga Colonna, Sabbioneta, Galleria, Portrait

* 非常勤講師

1. 緒言

北イタリアのロンバルディア平原を流れるポー川とオリオ川の間域、旧ヴィテッリアーナ街道沿いにサッビオネータ (Sabbioneta) ⁽¹⁾ という現在も城壁で囲まれた小さな都市がある〔図 1〕〔図 2〕。



図 1 星型の要塞都市サッビオネータ



図 2 サッビオネータの地図上の位置

ロンバルディア州とエミリア・ロマーニャ州の州境となるクレモナ司教区の東端、マントヴァから南西約 34km、パルマから北約 30.5km のところに位置し ³⁾⁴⁶⁾、人口 4251 人 (2016 年 1 月 1 日現在) ⁵⁰⁾、面積わずか 37.47km² の極めて小さなコムーネ (基礎自治体) である。第一次大戦で破壊された要塞と城壁の一部を除き、16 世紀後半に築かれた六角形の星形の都市形態や ¹⁰⁾¹⁸⁾ ⁽²⁾、宮殿、大聖堂などの歴史的建造物がそのままの姿で残されていることから、貴重な文化遺産として 2008 年にユネスコの世界遺産に登録されている ⁽³⁾。

16 世紀まで城砦と幾つかの聖堂があるだけの村落に過ぎなかったサッビオネータは、初代公爵となるヴェスパシアーノ・ゴンザーガ・コロナ (Vespasiano Gonzaga Colonna, 6 Dec. 1531 ~

26/27 Feb. 1591)〔以下、ヴェスパシアーノと略す〕の時代に政治的にも文化的にも大きく発展し ⁽⁴⁾、今日見ることができる六つの稜堡 ⁽⁵⁾ を備えた星形の要塞都市 ⁽⁶⁾ の姿に生まれ変わる。

ヴェスパシアーノは、ロンバルディアのマントヴァ公国を支配したゴンザーガ家傍系出身の父ローナ (1500 ~ 1532) とローマの名門貴族コロナ家出身の母イザベッラ (1513 ~ 70) の嫡子として、1531 年 12 月 6 日にナポリ王国のフォンディ (現ラツィオ州フォンディ) で生まれる ¹⁾²⁵⁾。父が早世したことから、祖父ルドヴィーコ (1480 ~ 1540) のロンバルディア地方における 5 つの領地 (サッビオネータ、ロディーゴ、リヴァローロ・フォーリ、ボッツォロ、オスティアーノ) を 8 歳で相続し ⁵⁾、父方の叔母ジュリアの後見のもと、ナポリ宮廷で優れた人文教育を施される ⁽⁷⁾。14 歳になる 1545 年には、スペイン宮廷に送られて神聖ローマ皇帝カール五世の息子フェリペ王太子 (後のスペイン王フェリペ二世) の名誉小姓として仕え、傭兵隊長として皇帝、王太子から高く評価され ¹⁾¹⁷⁾²²⁾、スペインのナバラ副王 (1572 ~ 75)、バレンシア副王 (1575 ~ 78)、そして当時の西欧宮廷で最も誉れの高かった金羊毛騎士団員 (1585) にも任命される ¹⁾¹⁷⁾²²⁾。さらにオーストリア・ハプスブルク家の歴代皇帝からも愛顧を受け、1565 年には皇帝マクシミリアン二世から侯爵、1574 年には帝国諸侯 ⁽⁸⁾ を授爵し ¹⁾、1577 年には皇帝ルドルフ二世から公爵に陞爵され ¹⁾、サッビオネータは彼の時代に一地方領地から世襲的特権を有す公国にまで昇格する。

このほか要塞の築城術に通暁したヴェスパシアーノは、1551 ~ 54 年頃よりサッビオネータの都市建設に着手しており ²⁾²⁵⁾ ⁽⁹⁾、もともとあった城砦以外の建物をすべて壊した上で、市壁内に居城、聖堂、広場、裁判所、劇場、離宮、造幣所 (現存せず)、シナゴグ、ユダヤ人印刷所 (現存せず) ⁽¹⁰⁾ を設け、人文主義教育のアッカデーミア (高等教育機関) を創設するなど ¹⁾、司法行政・経済・宗教文化の多岐に渡る都市活動に配慮した都市建設・運営を進めた〔図 3〕。

そのなかで早くから竣工しはじめたのがヴェスパシアーノの居城となるパラッツォ・ドゥカーレ (「公爵の宮殿」の意) である。そこにはヴェスパシアーノの寝室のほか、妻アンナ・ダラゴーナ ⁽¹¹⁾ の居室、ハプスブルク家の重鎮でヴェスパシアーノにとって軍の上官に当たるスペイン貴族アルバ

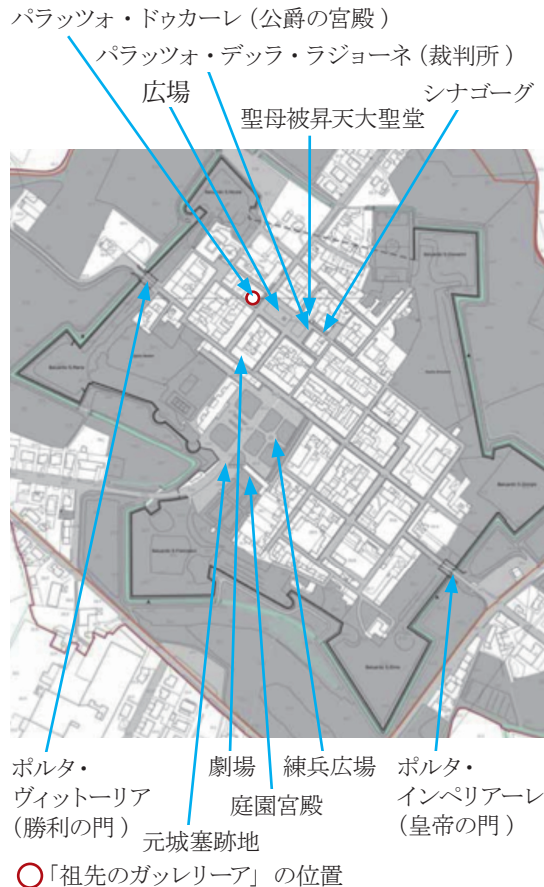


図3 サッビオネータの都市図

公の部屋なども設けられ²⁵⁾、また、建物内には12体の歴代ゴンザーガ家当主の等身大寸法の本彫騎馬像が置かれ¹⁾、正面入口には彫刻家・メダル制作者のレオーネ・レオーニ作ヴェスパシアーノの全身ブロンズ像が設置されるなど¹⁾、まさにサッビオネータ君主の邸宅に相応しい肖像のイメージで飾られていた。

本稿は、このパラッツォ・ドゥカーレ二階に設けられた、「祖先のガッレリア」Galleria degli Antenatiと呼ばれるゴンザーガ家祖先の肖像で飾られたギャラリーの室内装飾分析を行うものである。当時のヴェスパシアーノを取り巻く文化的背景を鑑みつつ、この部屋に収められた一族の肖像群と天井フレスコ画の神話図像、古代帝国イメージを図像分析し、それらの意味について図像学的視点から考察を行うものである。

2. サッビオネータ小史—ゴンザーガ家支配まで

サッビオネータの歴史については、古代・中世を通じて殆ど知られていない。8世紀後半にラン

ゴバルド王国がカール大帝に滅ぼされた後、レーノ（現ブレシャ県のコムーネ）のベネディクト修道士たちが大帝から所領として贈与され、歴代皇帝の承認を受けながら久しく修道院領とされてきたと言われている²¹⁾⁴⁷⁾。その後11～13世紀にかけて、ドイツ出自のペルジコ家（i Persico）とクレモナ出身のギベリン派ドヴァーラ伯爵家（i Dovara）が交互に領主支配を行い、1314～61年にはマントヴァの僭主であったボナコルシ家が支配した²¹⁾⁴⁷⁾。

サッビオネータの領主としてゴンザーガ家の支配が始まるのは15世紀に入ってからである。初代マントヴァ侯爵ジャンフランチェスコ・ゴンザーガ（1395～1444）が1426年にサッビオネータを攻略し、その3年後にヴェネツィア共和国から傭兵隊長として活躍した褒賞に、サッビオネータとブレシャ、クレモナの幾つかの所領地を贈与され、以後正式に支配を始めたとされている⁴⁷⁾。その後、1444～56年にはジャンフランチェスコの次男カルロ（1417～56）、1456～78年には兄の第二代侯爵ルドヴィーコ二世（1412～78）が支配し、1478年からルドヴィーコの三男であるジャンフランチェスコがサッビオネータの傍系の祖として分家を築く。その二代目は彼の長男ルドヴィーコ（?～1540）が継承し、三代目はルドヴィーコの長男ルイージ（1500～32）が早世したため、遺児として残されたヴェスパシアーノが祖父の後を継ぎ、この地に黄金時代を築くこととなる²¹⁾⁴⁷⁾。

3. パラッツォ及びガッレリアについて

本論に入る前に、ここで用語の意味をいくつか確認しておきたい。

1) パラッツォ・ドゥカーレ (Palazzo Ducale)

まず、パラッツォとはイタリア語で「宮殿」を意味し、英語のパレス (palace)、フランス語のパレ (palais) に相当する言葉である。語源は古代ローマ皇帝アウグストゥスがローマのパラティウム（ラテン語 Palatium）の丘に造営した宮殿に由来し、14～15世紀には都市の支配者層（君主、貴族、大商人、高位聖職者）の邸宅や居城なども意味するようになった⁸⁾³⁰⁾。さらに市庁舎や裁判所といった公共建造物を指す意味でも用いら

れるようになり¹⁵⁾、たとえばシエナの市庁舎は「市民の館（宮殿）」を意味するパラッツォ・プブリコ (Palazzo Pubblico)、フィレンツェのシニョーリア広場に面した旧政庁舎は「古い館（宮殿）」を意味するパラッツォ・ヴェッキオ (Palazzo Vecchio) と呼ばれ、北イタリアに多くあるパラッツォ・デッラ・ラジオーネ (Palazzo della Ragione) は「理性の殿堂」という意味を持ち、中世以来、裁判所を指した。

ヴェスパシアーノの宮廷官吏であったニコロ・デ・ドンディの日記 (1580～1600) から、当時、ヴェスパシアーノの邸宅が「宮殿（居城、大邸宅）」を意味するパラッツォ “palazzo”, 「大宮殿」を意味する “palagio grande”, もしくは「広場に面した宮殿」を意味する “il suo palazzo in piazza”¹⁶⁾ などと呼ばれていたことが知られている。

一方、ドゥカーレ (ducale) という言葉は、イタリア語で「公爵」（ドゥーカ duca）を意味する爵位の形容詞に当たり、「公爵の」、稀に「総督の」を意味した。ゆえにパラッツォ・ドゥカーレは一般に「公爵の宮殿」を意味し、この名をもつ建造物はイタリア各地に見られる。ウルビーノやグッピオ、マントヴァといった公国における君主の居城（家族と暮らす邸宅と政務を行う公的機能を兼ねる場合が多い）や、さらにヴェネツィアやジェノヴァなどの共和国の政庁舎（任期制総督の邸宅を兼ねた）の場合にもパラッツォ・ドゥカーレと呼ばれた。

2) ガッレリーア (galleria)

次にガッレリーアという言葉であるが、これは「画廊」「絵画陳列室」を意味する英語のギャラリー (gallery)、フランス語のギャルリー (galerie) のことであり、イタリア語で「絵画、彫刻など美術品を飾った回廊」「通路にも使う長い部屋」「美術館」という意味をも持つ⁶⁾。伊語辞典¹⁵⁾によると、もともとは建物内の翼と翼をつなぐ通路的機能を有する空間で、十分な広さをもった細長い部屋を意味した。伊語語源辞典⁸⁾によると、10世紀頃の中世ラテン語では回廊、通路の意味をもち、16世紀になってようやく「展示」「陳列」の意味が現れてくる。

16世紀後半から18世紀にかけて、イタリア、フランス、イギリス、スペイン、ドイツの宮殿に登場してくるガッレリーアは、絵画や古代彫

刻などの蒐集品を来賓に披露する部屋や回廊を意味するようになっていた。現在フィレンツェにあるウフィーツィ美術館（イタリア語でガッレリーア・デッリ・ウフィーツィ Galleria degli Uffizi）もその好例であり、1591年には美術作品の一部を一般公開し始めるなど、今日的な意味での美術館の先駆もなしていた⁷⁾。

当時、ガッレリーアを飾った美術品の多くは肖像画で、歴史的著名人や祖先や遠戚まで含む一族の肖像画が収蔵されていた⁶⁾。肖像画が独立した絵画ジャンルとしての地位を得ていくのは15世紀後半から16世紀にかけてであり、王侯貴族間で贈呈用やお見合い用、権威を喧伝する政治目的の国家肖像画など多面的用途をもって制作され、肖像専属の芸術家たちも雇用され、西欧宮廷文化の重要な一面を担うようになっていた。

ヴェスパシアーノの主君であるスペイン王フェリペ二世がマドリード近郊のパルド宮殿に設けた肖像ギャラリー（1604年の火災で焼失）や⁵⁶⁾、ゴンザーガ家の縁戚で芸術庇護者として名高いハプスブルク家のチロル大公フェルディナンド二世がインスブルックのアンブラス城に蒐集した1000枚もの肖像画^{4)19) 12)}などはその一例である。

とりわけ、パルド宮殿のギャラリーは1550年代、フェリペ二世の宮廷肖像画家アントニス・モルの監督のもとにつくられ、ハプスブルク一族と重鎮、宮廷画家の計45枚の肖像画を飾る特別な展示室として構想されたことで知られている。スペインをはじめ、オーストリア、ドイツ、スペイン、ネーデルラント、ポルトガル、そしてフェリペ二世の前妻メアリー・チューダーのイギリスを加えた6地域のハプスブルク家ゆかりの重要人物の肖像画を展示したこのギャラリーは、スペイン王の権威、その広域版図を示した事例でもあった¹³⁾。

ゴンザーガ家の本家マントヴァ宮廷でも、パラッツォ・ドゥカーレのガッレリーア・デッラ・モストラ（展示の回廊）に蒐集したルーベンスやフランス・ポルピュス（子）による肖像画を展示し²⁴⁾³⁸⁾、ゴンザーガ家の傍系のグアスタッラ公爵チェーザレ・ゴンザーガも画家フェルモ・ギゾーニに依頼して一族の肖像画を制作させ、それらを自分の書斎に展示していた⁵³⁾。

マントヴァやマドリード、インスブルックの宮廷と近い関係にあったヴェスパシアーノが各

地の肖像ギャラリーを実際に見て、関心を高めたことは想像に難くはないだろう。おそらくこれから先行例で得た知識をもとに彼のガッレリアを構想し、当時建設中であったパラッツォ・ドゥカーレの中に造営していったものと思われる。

4. 「祖先のガッレリア」の造営

1) 外観

それでは、建物の外観から見ていきたい。パラッツォ・ドゥカーレの正面ファサード〔図4〕を見ると、建物は三階建て階段ピラミッドの形をしており、三階部分にはヴェスパシアーノの寝室に当たる塔が付加されている。ファサードは上下二層に区切られ、一階は5つの連続アーチをもつ開廊、二階にはアーチと対応して5枚の窓が均等に配置されている。



図4 パラッツォ・ドゥカーレ（サッピオネータ）

「祖先のガッレリア」はこの二階中央に設けられたバルコニーの奥、ちょうど一階の正面入口の真上に位置する。室内の東側にはバルコニー付きの大きな窓が設けられ、窓の下には大きな広場（現在のガリバルディ広場、又はドゥカーレ広場）が広がり、さらに左手に聖母被昇天聖堂、シナゴグ、正面にパラッツォ・デッラ・ラジョーネ（裁判所）が見え〔図3を参照〕、まさにここが行政・司法・宗教の中心を形成していたことがわかる。

2) 制作年代

次に、制作年代についてであるが、まずパラッツォ・ドゥカーレの造営は、第一期1559～68年、第二期1577～91年の大きく二つの時期に行われたものと推定されている¹³⁾¹⁴⁾。第一期と第二期の空白期間（1568～77）はヴェスパシアーノ

がサッピオネータを不在にして、フェリペ二世の命に従い、スペイン、北アフリカで活躍していた時期に相当する。

パラッツォの形体は東西に長い直方体で、東側の玄関門から西側の奥へと細長く伸びている。ペトラッコは、建物内部の作業について、各部屋の天井に用いられた木材の種類の違いから、制作時期をさらに三段階に分けて検討している³⁵⁾。

一階と二階で作業時期は異なるが、「祖先のガッレリア」のある二階〔文末資料1〕に関しては、第一制作時期1561～62年（唐松材の天井）、第二制作時期1577～85年（胡桃材の天井）、第三制作時期1585～91年（シトロン材の天井）の三段階に区分され、「祖先のガッレリア」の造営はその第一期、1561～62年に属している²⁵⁾³⁵⁾。

また「祖先のガッレリア」の室内装飾の作業期間に関しては、壁面に装飾されたヴェスパシアーノの肖像の下に、ラテン語碑文で“VESPASIANUS GONZ (AGA) / COL (UMNA) SABLONAETE / MARCH (IO) I ROTIGI / COMES III.”（初代サッピオネータ侯爵、第三代ロディーゴ伯爵ヴェスパシアーノ・ゴンザーガ・コロナ）と刻まれていたことから、ヴェスパシアーノが侯爵位にあった1565～74年の間であったと特定できる⁵¹⁾。さらに、ヴェスパシアーノの息子ルイージの肖像の下にも“ALOYSIUS / [...] / INFANS”（幼少の[...] ルイージ）という碑文が添えられ、ヴェントゥーラはこの“infans”というラテン語がもともと「無言の、黙っている、片言の」を意味することから¹⁵⁾、ルイージが話し始める前の年齢、つまり2歳以前の姿を表していたとし⁵¹⁾、室内装飾の作業期間を1565～67年と推定している。この指摘については、さらなる史料的裏付けと検証が必要となるが、ルイージが幼児姿で表されていることから遅くとも1560年代後半には終わっていたものと考えられる。

3) 制作者

パラッツォ・ドゥカーレに関わった建築家については詳らかでないものの、室内装飾に関しては数名の画家・工人の名前があがっている。

最も有名な画家、クレモナ出身のベルナルディーノ・カンピ、ベルナルディーノ・カンピが

最も信頼を置いた協同制作者の一人ジョヴァン・アントニオ・モランディ（1580年10月4日）⁴⁴⁾、サッピオネータの造幣所監督官を任されていたアルベルト・カヴァッリ、ミケランジェロ・アリブランディ⁴⁴⁾⁵⁴⁾、フランドル出身の画家ジョヴァンニ・ダ・ヴィッラ、そのほかフォルナレット・マントヴァーノ、カミッロ・ボッリーノ、ジョヴァンニ・アントニオ・リヴォルティ、ジュリオ・ルポーネ、フランチェスコおよびアンドレア・スクテラーリ、ペセンティ家、ジョヴァンニ・ダ・ヴィッラ等の工人たちの名前が知られている⁷⁾。

「祖先のガッレリア」の室内装飾を担当したのは、その中でもおそらくサッピオネータ出身の彫刻家・金細工師・メダル制作者であるアルベルト・カヴァッリと、風景画を担当したと考えられているフランドル出身の画家ジョヴァンニ・ダ・ヴィッラが推定されている¹⁸⁾。

5. 室内装飾分析

1) 「祖先のガッレリア」―「太陽の小間」との関係

部屋の形体を見ると、室内は東西に長い直方体の空間をとり、天井に筒形（ドラム式）ヴォールト¹⁶⁾を配している〔図5〕。



図5 「祖先のガッレリア」

部屋の北壁と南壁に各1箇所ずつ出入口が設けられ、西壁中央には隣の「太陽の小間」と呼ばれる小部屋に続く出入口が設けられている。

〔文末資料2〕を見ると、「祖先のガッレリア」は建物の東側中央に位置し、窓も東側に設けられ、部屋から日の出の太陽が臨めるようになっている

ことがわかる。ヴォールトの中央には太陽の馬車を駆るアポロの姿（後述）が大きく描かれ、隣室の「太陽の小間」のヴォールトにもまた、燦然と輝く大きな太陽が描かれており〔図6〕、東から昇る太陽の運行のように示されている。



図6 「太陽の小間」ヴォールト

実際、建物の東西軸線上に「祖先のガッレリア」「太陽の小間」が並んで置かれ、広場に向かって開かれた窓からは日の出の太陽が差し込むよう建物の向きが設定されていたことから、おそらくこの建物の造営に当たり、太陽の方位を意識した室内装飾プランが検討されていたものと思われる。

2) 祖先の肖像―古代のイマギネス・マイオールム

続いて室内の壁面を見ると、上部のみが装飾されており、そこには部屋全体を取り巻くよう、ゴンザーガ家当主と正妻の肖像が彩色漆喰浅浮雕（レリーフ）として計21体、時計回りに配置されている〔文末資料2〕。アルベルト・カヴァッリ作と推定されるこれらの肖像レリーフは、すべて一体ずつ美しい枠に嵌まった板絵のように収められ、薄い青地に白大理石のように漆喰で肉付けされ、彼らが生きていた当時の髪型と衣装、もしくは武具甲冑姿で表されている。これらはすでに版画や他の肖像画を通じて知られていた肖像の型を利用し、制作されたものと推定されている⁵¹⁾。

ヴェントゥーラは1556年1月4日付のヴェスパシアーノの書簡から、「ゴンザーガ家一族のすべての肖像画」¹⁾ ¹⁷⁾を入手するため、彼が秘書のムツィオ・カピルーボをサッピオネータ公爵の代理としてマントヴァに遣わし、肖像画の所有主であるフェデリーコ・ゴンザーガ・ダ・ガッツォーロに交渉させていたことを指摘しており、ヴェスパシアーノが早い段階から一族の肖像を飾るガッレリアの造営を考えていたものと推測している⁵²⁾⁵³⁾。

この21体の肖像レリーフのはじまりは南壁の東端に配置された初代マントヴァのカピターノで、ゴンザーガ家の王朝を築いた始祖ルイー・ゴンザーガとその妻キルダ・ランベルティである。そこからは第二代侯爵ルドヴィーコ二世と妻バルバラ・フォン・ブランデンブルクまで、マントヴァ本家のゴンザーガ家の系譜が続く。バルバラに続く君主は、ルドヴィーコ二世の三男で、サッピオネータの傍系の祖となるジャンフランチェスコと妻アントニア・デル・バルツォ（1460頃～1538）である。ルドヴィーコ二世は亡くなる際、長男フェデリーコ一世にマントヴァの領地を残し、三男ジャンフランチェスコにサッピオネータの領地を与え、拡大する支配領地を息子たちの間で分割して統治させることにしたのである。ヴェスパシアーノの高祖母であるアントニア・デル・バルツォの後はサッピオネータの傍系が続き、最後はヴェスパシアーノとアンナ・ダラゴナ、そして14歳で夭逝することになる一人息子のルイー（1565～80）まで表されている。

ヴェントゥーラの指摘にもあるが、このような一族祖先の肖像を並べた展示空間は、かつて古代ローマ貴族たちが邸宅のアトリウム（玄関広間／中庭）に飾った祖先の肖像、イマギネス・マイオーラム（*imagines maiorum*）の家族崇拜・祖先崇拜を想起させる²⁹⁾⁵²⁾⁵⁵⁾ (18)。共和制ローマ時代の貴族たちは、亡くなった祖先の顔の蠟製デスマスクをつくり、木製棚に仕舞い、葬式の際に持ち出して共に過去から現在までの一族の栄光の事績、由緒正しき血統を知らしめる古代習慣を有していた。

実際に、ヴェスパシアーノがこの習慣を知っていた可能性を示唆する出来事として、1587年9月18～19日に執り行われたマントヴァ公爵グリエルモの葬礼の際、自分自身と祖先の計12体の木製騎馬像を制作させて、祖先の像とともに騎馬行列を成して参列したことが知られている⁵⁾ (19)。さらに、パラッツォ・ドゥカーレ前に設置していたレオーネ・レオーニ作ヴェスパシアーノのブロンズ像も、亡くなる際の遺言でサッピオネータの聖母戴冠聖堂におけるヴェスパシアーノの霊廟の上に移すよう指示を与えており¹⁾⁵⁾、像（イマギネス）に対する古代習慣、像への信仰なるものを伺わせる。ヴェスパシアーノの母親はローマの名門コロンナ家出身者であり、彼自身も古代ローマ習俗における祖先の肖像の取り、宗教文化についての知識を有していた可能性は十分に考えられる。それ

らを鑑みると、ここに表されたゴンザーガ家一族の肖像は、一族の血の系譜とその輝かしい事績を伝えるものであり、とりわけサッピオネータのゴンザーガ家の栄光を示すものであったと思われる。

3) 夫婦像とジェンダー

さらに、この夫婦像の並び方についても考察したい。ここに並ぶ肖像群は、すべて左側に男性、右側に女性を置き、両者が向き合うような姿で表されている。中世キリスト教図像学ではキリストの右手側（向かって左）が善、キリストの左手側（向かって右）が悪とする左右のヒエラルキアが決められており、寄進者の夫婦像を描く際にも夫（男性）が右手側、妻（女性）が左手側に描かれる形式が伝習的にとられていた〔図7〕。



図7 ピエロ・デッラ・フランチェスカ《慈悲の聖母》, 1453-54年頃, 板・テンペラ, 134×91cm, 市立美術館, サン・セポルクロ

この男女左右の形式は、15、16世紀の肖像文化にも持ち込まれ、ヤン・ファン・エイクの描いた有名な《アルノルフィーニ夫妻の肖像》〔図8〕やロレンツォ・ロット作《マルシリオ・カッソッティとファウステーナの肖像》(1523)などの夫婦像にも男女左右の形式が応用されている。



図8 ヤン・ファン・エイク《アルノルフィーニ夫妻の肖像》, 1434年, 油彩・板, 82×60cm, ナショナル・ギャラリー, ロンドン

ティツィアーノ原作（ルーベンス模写）《皇帝カール五世と皇妃イサベルの肖像》（17世紀初頭）〔図9〕、ヤン・コルネリス原作（フェルメイエン模写）の二翼衝立絵画《皇帝フェルディナンド一世と皇妃ハンガリーのアンナ》（1531以降）、アントニス・モルによる二連作の油彩画《皇帝マクシミリアン二世》（1550）と《皇妃マリア・デ・アブスブルゴ》（1551）などハプスブルク家の皇帝夫妻像にも同様の肖像形式が看取される。



図9 ティツィアーノ（原作）ルーベンス（模写）《カール五世と皇妃イサベルの肖像》，17世紀初頭，油彩，パラショ・デ・リリア，マドリード

「祖先のガッレリーア」の肖像を手掛けたメダル制作者・彫刻家であるアルベルト・カヴァッリは、サッピオネータの造幣局の監督官を務め、メダルや貨幣の肖像も手掛けたことから、当然ながら肖像の構図についてある程度の知識を有していたものと考えられる¹⁾。ゆえにゴンザーガ家一族の肖像にみる男女左右の配置も、中世以来の伝統に則った可能性として考えることができるだろう。

また、これら肖像レリーフの下には同じ横幅の四角枠の碑版が付されている〔図10〕。男性像には名前と爵位が刻まれ、女性像には名前と父親方の出自が刻まれている。



“ANNA・ARAGON/IA・SEGORBE・DV/CVM・F・HENRICI/INFANTIS・NEPOS”
（アンナ・ダラゴーナ
セゴルベ公爵の娘
〔カトリック王〕フェルディナンドの兄弟
ハインリヒの曾孫）

図10 《アンナ・ダラゴーナの肖像》と碑文

つまり、男性にとっては社会的身分、女性にとっては父の実家の血筋に由来する家門、血統の由緒正しさが重要であったと言える。実際、歴代ゴンザーガ家の当主は、マラテスタ家やヴィスコンティ家、エステ家など中世以来の伝統をもつ貴族や、皇帝家の血筋であるブランデンブルク家やビザンティン帝国の流れを汲むパレオロゴ家との結婚政策を通じて権威の伸長と領地拡大を進めていたことから、妻の家門は夫にとっても誉れとなり、重要な意味を有していたと言える。

ヴェスパシアーノは生涯で三度結婚するが、最初の二人はスペイン・ハプスブルク家と所縁の深いスペイン貴族出身であった。最初の妻は、シチリア副王安トニオ・カルドーナとベアトリス・デ・ルーナ・ダラゴーナの娘ディアナ・フォルチ・デ・カルドーナ（1531頃-1559）で、1549年に結婚する。彼女はシチリア島に大所領（ジュリアーナ侯領、キウーザ伯領、ブルジョ・ネッラグリジェンティーノ）をもつ叔父アルフォンソ・カルドーナの遺産相続人であり、これによりヴェスパシアーノはシチリアの所領地を得ることに成功する。ディアナの死後、1564年の二番目の結婚では、アラゴン王家出身のセゴルベ第二代公爵にしてバレンシア副王アルフォンソ・トラスタマラ・デ・アラゴンとカルドーナ公爵夫人ジョヴァンナの娘アンナ・トラスタマラ・ダラゴーナ（?-1567）を妻に迎える。この結婚でヴェスパシアーノはスペイン王家と縁戚関係を結ぶことに成功し、嫡子ルイージと双子の娘イザベッラとジュリア（ジュリアは出生後まもなく死亡）という跡継ぎにも恵まれる。

ゆえに「祖先のガッレリーア」を飾る二番目の妻アンナ・ダラゴーナと息子ルイージの肖像は、とりわけヴェスパシアーノにとってのこの上ない栄誉を与えた女性と、自分の後継という未来のサッピオネータを象徴するものであったと考えられ、他の祖先の像と共にゴンザーガ家の歴史を綴るこの部屋に位置づけられていたものと思われる⁽²⁰⁾。

4) 天井画

(1) 図像プログラムの構成

天井を見ると〔図11〕〔文末資料2〕、全体が帯状の漆喰装飾で組紐紋のように枠づけられている。大小の楕円形あるいは四角形に区画化されており、枠外にはグロテスク文様、枠内の格間にはフレスコ画あるいは漆喰浮彫装飾が施されている。



図 11 ヴォールト

画面中央の大きな楕円形には空の上で馬車を駆る太陽神アポロの姿が描かれ、その東側には軍神マルス、西側にはユピテルの伝令者・叡智・商業を司るメルクリウスが描かれている。また神々の間には古代ローマの五賢帝のうち最初の四代ネルヴァ、トラヤヌス、ハドリアヌス、アントニヌス・ピウスの漆喰頭像が表されている⁵⁴⁾。さらに、中央のアポロの斜め四方に配置された四枚の漆喰装飾には古代ローマ人の美德と武勇を表象する共和制ローマ時代の英雄譚、ホラティウス・コクレス²³⁾、ガイウス・ムキウス・スカエウォラ²³⁾、ルキウス・キンクティウス・キンキナトゥス²³⁾、メッティウス・クルティウス²³⁾から主題がとられており、伝説の救国物語が示されている²¹⁾。またこの四枚の漆喰装飾を左右挟むように、アルカディア的な牧歌的風景画が計六枚描かれている。

つまり、異教神話イメージにおける軍神マルスは傭兵隊長としてのヴェスパシアーノを称揚し、叡智の神メルクリウスはヴェスパシアーノの知性、学術文芸庇護者の活動を讃えるイメージで、いずれも文武両道の理想君主像の常套主題であり、15世紀よりイタリア人文主義で敷衍した神話解釈、図像学から解釈できるものである。

一方、ローマ主題においても、古代ローマ英雄が示す美德の鑑 *exempla* は、そのままヴェスパシアーノの勇敢さ、武勇を称揚する軍事的美徳イメージと結びつき、五賢帝の肖像もまた有能かつ賢明な執政者としてのサッピオネータ侯爵ヴェスパシアーノを賛美するものであり、どちらも明快な図像学から構成されていたことが読み取れる。

(2) 太陽神アポロ

天井中央に描かれた太陽神アポロに注目すると、古来より、死と再生復活、永遠性を象徴するモチーフとして、太陽ないし太陽神は古代エジプトやヨーロッパ、アジア各地の王権表象のなか

で利用されてきた、ベルテッリの研究から、中世キリスト教神学においても、太陽（太陽神）はキリストの死と復活と同一視され、キリストを“sol salutis”（救いの太陽）、とりわけ日の出の太陽は復活するキリストの姿、死からの勝利として“sol Invictus”（不滅の太陽）と見なす神学解釈が生まれていたことも知られている⁹⁾²⁰⁾。ゴンザーガ家宮廷でも、君主のエンブレムとして14～18世紀初頭まで頻繁に使用されており、たとえば第三代カピターノのフランチェスコの貨幣裏面には光線を放ち燦然と輝く太陽図像に“ascente”（上昇する）のモットー（銘）が添えられ、日の出の太陽に支配の永遠性を祈念させていた³²⁾。第二代侯爵ルドヴィーコ二世も日曜日（太陽の日）生まれであったことから、自分を象徴させるイメージとして“PAR VN SOL DESIR”（太陽の意志によって）をモットーとする太陽のインプレザ（標章）を頻用し、太陽の永遠性と自己の政治支配とを重ねさせていた³¹⁾⁴⁸⁾。

また、「祖先のガッレリア」に関して言うならば、近年、J・ピーパーが行った日の出の光の角度検証から、この部屋がヴェスパシアーノの生まれた12月6日の日の出、もしくはそれに近い冬至の日の出の光がちょうど東窓から真正面に室内に差し込むよう、天文学的に精密計算された上で造営されていたことが指摘されている〔図12〕³⁷⁾。ピーパーはすでに、イタリア中部のピエンツァの大聖堂の位置についても、夏至の南中の光が差し込む角度との関係性を調査報告で出しており、天体、山岳崇拝などの古代信仰とキリスト教文化の融合について興味深い研究を行っている³⁶⁾。



図 12 日の出の太陽（Jan Peper 撮影）

この考古天文学の研究を通じて、近年、冬至や夏至、春分や秋分など太陽運航の変わり目となる特別の日の“日の出の光”を取り込むプランが古

代から近世にかけての都市や建造物に少なからずあったことが指摘されている⁴³⁾。カステル・デル・モンテの八角形城塞（13 世紀）やパドヴァのスクロヴェーニ礼拝堂（14 世紀）、ヴェルサイユ宮殿の王の寝室（17 世紀）のプランはその代表例である^{42) 43) 49)}。実際、ヴェスパシアーノが天文学に少なからぬ関心を抱いていたことは、ブトレマイオスの『アルマゲスト』やアストロラーベをコレクションとして所蔵していたことから知られており^{14) 27)}、「祖先のガッレリア」もまた、ヴェスパシアーノの誕生を祝う意味を込めて、もしくは冬至という太陽の死と再生の瞬間の光を取り込む意味でこの部屋の方位、引いては建物の方位を決定していたものと推定できる。

じつはゴンザーガ家の文化事業でも、すでに太陽の運行、太陽の光を考慮したこうした建築空間の先行例が存在していた。通称「婚礼の間」Camera degli Sposi という名で知られる^{12) (22)}、第二代侯爵ルドヴィーコ二世とその正妻バルバラ・フォン・ブランデンブルクの結婚を称揚してマントヴァのサン・ジョルジョ城塞二階に設けられた部屋である。マントヴァの宮廷画家アンドレア・マンテーニャが制作したルネサンス美術の傑作のひとつとされるこの部屋には、侯爵夫妻を中心に子どもたち、宮廷人たちの姿を描いた《宮廷》と呼ばれる壁画、侯爵とその子息、孫（男子のみ）を中心に描いた《邂逅》と呼ばれる壁画がある。

とりわけ、《宮廷》には皇帝家出自の侯爵夫人バルバラを中心に左に夫、そして彼女が生んだ 10 人の子どものうち 5 名を配置してゴンザーガ家の子孫繁栄が讃美されている。また《宮廷》の画面にはちょうど東窓から差し込む日の出の光が当たり、生命の誕生、再生復活を象徴する太陽の光が当たるよう窓が配置し直されている^{31) 40)}。一方、《邂逅》はゴンザーガ家に所縁のある男性群像が集まって描かれており、中央にルドヴィーコと嫡子フェデリーコ、フェデリーコの嫡男フランチェスコの 3 名と、ルドヴィーコの次男で枢機卿フランチェスコ、五男で教皇庁書記長ルドヴィーコ、後に枢機卿となる孫ジギスムントが描かれ、政治的権威と宗教的権威の男子 3 名ずつが配置され、そこに北極星の不動の光、もっとも一定した北の太陽光線^{31) 40)} が当たるよう窓が設けられ、これもゴンザーガ家支配の不変性を表象していた。

ここで再び「祖先のガッレリア」に戻りたい。東壁を飾る肖像は、先にも触れたアンナ・ダラゴー

ナとルイーージの 2 体である。すなわち太陽の昇る方向にヴェスパシアーノは妻と嫡子の肖像を置き、毎日甦る太陽のごとく二人の命の永遠性とその名声の不朽を表象させたということも考えられるだろう。ヴォールトのアポロの姿に目をやると、太陽神の右手にラテン語碑文入りの白いスクロールが翻っているのが看取できる。スクロールには“OCIORVT・FAMA・IM / PLEAM・AVITI ODAS”（わたくし、名声は祖先たちの〔事績を讃えた〕頌歌をより速やかに〔世界に〕伝えた）〔 〕内は筆者による加筆〕と記されており、壁面のゴンザーガ家祖先の栄光について示唆する文句であったことがわかる。すなわち、アポロはここで太陽を馬車で運ぶのと同時に、ゴンザーガ家の祖先一族の名声も乗せて天上を疾駆する姿で表されていたと読み取れる。ゴンザーガ家の名声は日々甦る太陽と同じく、永遠不滅のものであることを示唆していたとも言えるだろう。

6. 結論

以上、本稿ではサッピオネータの君主ヴェスパシアーノ・ゴンザーガ・コロナが居城パラッツォ・ドゥッカーレ内に造営した「祖先のガッレリア」を取上げ、室内装飾プログラムの図像分析を通じてゴンザーガ家君主が如何なる支配イメージをそこに創り上げていたのかについて見てきた。マントヴァの本家からサッピオネータの文化に至る全 21 体の祖先の肖像イメージを通じて、古代ローマのイマギネス・マイオールムに見る祖先崇拜・家族崇拜の古代習慣に通じる出自の正当性、血統の由緒正しき、そして祖先並びに自分の事績の栄光化が企図されていることを見てきた。とりわけ、サッピオネータの傍系貴族出身であるヴェスパシアーノにとっては、本家からの歴史を繋ぐことが彼の政治的威信、支配の正当性を裏付ける根拠となり、不可欠な政治的喧伝項目であった。また、アラゴン王家出身の妻アンナ・ダラゴーナの肖像はヴェスパシアーノの政治的成功も象徴する祝婚歌でもあり、嫡子ルイーージの肖像は未来に引き継がれるサッピオネータ王朝の繁栄のシンボルでもあった。こうした祖先の肖像のコレクションイズムとその展示は 16 世紀の絶対主義前夜の西欧諸宮廷で隆盛するが、支配領域の規模の拡大と中央集権化の促進という政治課題を抱えた 16 世紀後半の宮

廷にとって、祖先の事績の権威をイメージで借りつつ実質的な支配網の円滑化を図るものとして「肖像」というメディアが担った政治的価値はもはや無視できないものに成長していたということができよう。ゆえに膨大なコレクションを恒久的に展示できるスペースとしての肖像用ガッレリアもまたこの時期に必然性をもって誕生したと言える。

続いて中世以来の王権表象でもある太陽のイメージ、とりわけ日の出の太陽は、ゴンザーガ家の歴代君主がインプレーザに頻繁に取り入れた常套的な支配イメージの一つであった。日の出の日没を繰り返す不滅の太陽の視覚文化は支配体制の永遠性を願う権力者の格好の視覚文化、政治的セルフイメージであることから考察を行った。しかもサッピオネータのパラッツォ・ドゥカーレ二階の初期の造営箇所にはとりわけ太陽運航を意識した窓や部屋の方角、そして装飾図像が関連性をもって構想されていたことも見てきた。

当時、ヴェスパシアーノがいかなる知的好奇心、文化的意欲をもち、これら建築・絵画・彫刻、都市の総合的な事業に取り組んだかについては今後、更なる研究が必要となるだろう。しかし、本稿で見てきたこの「祖先のガッレリア」を手掛かりに、16世紀後半のサッピオネータ宮廷の豊穡な政治文化の一端を垣間見ることができたと言うことができるだろう。

謝辞

本稿の執筆に当たり、前サッピオネータ・コムネ評議員ジョヴァンニ・サルトリ氏 dott. Giovanni Sartori、サッピオネータ観光協会責任者クリスティーナ・ヴァレンティ氏 dott. ssa Cristina Valentiをはじめ数多くの方々のご協力・ご指導を賜りましたこと末筆ながらここに記し、深謝申し上げます。尚、本稿は平成28年度科学研究費補助金「ヴェスパシアーノ・ゴンザーガの肖像研究：16世紀スペイン統治下のイタリア美術政策」（課題番号・15H06523、研究代表者・望月由美子）による研究成果の一部です。

注

- (1) このサッピオネータという名前の由来には諸説ある。一つは、アポロンの神託を受けた巫女サバ (Saba) の名前に由来するというもの²¹⁾、二つ目は、紀元前4世紀頃からこの地域を支配していたエトルリア24部族にサバ

ティーナ (Sabatina) という部族があり、その名に由来するという説⁴⁷⁾、最後は、ラテン語で「砂」、「砂浜」を意味するサブルム (sabulum)、イタリア語でサッビア (sabbia) を語源とするという説である²¹⁾。この最後の説は、かつてこの土地がポー川の支流、その他小さな河川が形成する砂地と沼沢地からなる地域であったことを示唆するものでもあり、これが通説とされている。

- (2) この都市建設事業は1551～54年頃に竣工し、市壁内には基盤の目に整備された約30の街区が設けられ、ヴェスパシアーノが亡くなる1591年まで30～40年間で完成された（聖堂内装飾や建物外壁の装飾など一部はヴェスパシアーノの死後も継続して行われた）²¹⁾²⁵⁾。竣工年に関して1551年と指摘されている理由は、ヴェスパシアーノが1551年にユダヤ人印刷所を市内に設けた記録からである¹⁾。一方、1554年と言及したのは、17世紀の年代記作者でマントヴァ出身の修道士フェデリゴ・アマデイ (1684～1755) の記録に基づく²⁾。
- (3) ユネスコの登録内容については以下参照 http://whc.unesco.org/en/list/1287/multiple=1&unique_number=1518 (2016年10月22日アクセス日)。「Mantua and Sabbioneta」の名で歴史遺産として登録；サッピオネータはユネスコ世界遺産登録のための準備を2002年より始めており、その段階から、都市の歴史建造物の保存管理方法を決めていくため、ボローニャ大学建築学部F. イヴァン・アボッローニオ教授による都市建設の歴史的経緯調査、建造物の類型学的分析、技術・材料面の研究調査、都市・道路の立面・平面図作成等が行われてきた³⁾。
- (4) ヴェスパシアーノの時代にサッピオネータは政治的・文化的黄金時代を迎えるが、男子相続者の欠如から、ヴェスパシアーノの死後、都市は急速に衰退し、1689年にはスペイン領ミラノ公国に併合されることとなる。ヴェスパシアーノの没後500周年で企画された展覧会『ヴェスパシアーノ・ゴンザーガ・コロナ (1531～1591)』(1991)と国際シンポジウムを契機に、近年再評価がはじまり、美術史、都市史、マイクロヒストリー、文献学など幅広い分野から研究が進められるようになった³³⁾³⁴⁾⁴¹⁾⁵¹⁾。
- (5) 稜堡とは、16～18世紀の西欧で大砲による攻防に備えて発達した城壁の突角部である。形体は三角形、半月型、王冠型などがあり、稜堡の登場によって相手の死角がなくなり、濃密な火網を形成しつつ、防御に適した城壁が誕生した。また稜堡に大砲を設置するスペースも取り、防衛だけではなく迎撃する力も向上した。
- (6) 城壁で周囲を囲み堅固に防御した都市を指す。15世紀半ば以降、イタリアでは火砲防衛に適した星形要塞の都市が考案されている。このとき、防御力を高めるため城壁は分厚く低くつくられるようになる。
- (7) ヴェスパシアーノの治世のうち、1540～50年(8～18歳)は摂政期間であり、1550～91年が実質の統治期間となる。彼の摂政にはマントヴァ公フェデリコ二世の弟エルコレ・ゴンザーガ枢機卿と同じく弟のフェッランテ・ゴンザーガが務め、後見人には父方の叔母

ジュリア・ゴンザーガが就き、優れた人文主義教育を施した¹⁾。

- (8) 帝国諸侯(ライヒスフルスト)とは、爵位体系のひとつ。封土の世襲化を許された封建領主(諸侯)のなかでも、皇帝と直接封建関係を結んだ皇帝直属の諸侯を意味。神聖ローマ帝国(実態は皇帝を盟主とする連邦)の構成国家たる領邦の君主というべき存在で、司法行政に関する権限を有した²⁸⁾。
- (9) 都市の計画・構想者は当時、軍事築城術の第一人者でもあったヴェスパシアノ自身といわれている。ヴェスパシアノは、ジローラモ・カッターネオ、ドメニコ・ジュンティなど当時の最新の築城術に通じた建築家と討論を重ね、サッピオネータを大砲防衛に適した星形要塞として建設したと言われている³⁾。
- (10) ヴェスパシアノは領内のユダヤ人に対して文化的宗教的な寛容策をとっていた。本家マントヴァも同様の政策を伝統的にとっており、財政問題をユダヤ人の経済支援で補う互恵関係を築いていた³²⁾。当時のサッピオネータでもっとも有力かつ富裕であったユダヤ人トビア・フォアによる活版印刷所(活動期間1551～59年)は有名で、ヘブライ語による重要な聖典も出版された¹¹⁾。
- (11) アンナ・トラスタマラ・ダラゴーナ(?～1567)はアラゴン王家出身のセゴルベ公の娘であり、フェリペ二世の親類でもあった。
- (12) フェルディナンド二世はヴェスパシアノとも親交をもち、甲冑を贈り交わす間柄であった²⁷⁾。さらにフェルディナンドはマントヴァ公爵グリエルモの娘アンナ・カテリーナ・ゴンザーガを二番目の妻に迎えており、ハプスブルク家だけではなくゴンザーガ家の一族の肖像画も116枚蒐集したことが知られている²⁶⁾。
- (13) パルド宮殿の肖像ギャラリーはさらに、部屋の中心軸上にフェリペ二世と三番目の妻であるフランス王家出身のエリザベート・ドゥ・ヴァロワの肖像を向かわせて配置し、スペイン王家とフランス王家の結合と王夫妻がハプスブルク帝国支配の中心にあることを明示した極めて政治性の高い展示空間を成していた⁵⁶⁾。
- (14) G・サルトーリの研究から、パラッツォ・ドゥカーレははじめ1550年代半ば頃より建設を始めていたが、1559年に起きた大火の影響で再建することとなった⁴⁴⁾⁴⁵⁾。そのため現在のパラッツォ・ドゥカーレは再建事業の造営物で、建設時期は1559～91年と推定³⁵⁾。
- (15) “infans”の反義語であるfansの動詞形はfor(話す、言う、予言する)である。
- (16) ヴォールト(穹窿)には様々な種類があり、筒形(ドラム式)ヴォールト、筒形を直交させた交差ヴォールト、リブ(梁)で補強した四部(六部)ヴォールト、扇形ヴォールトなどがある。
- (17) 手紙の内容は以下《Nel partir mio per Napoli ho lasciato ordine a Mutio Capilupio mio Secretario, che venendo in Mantova visiti V. S. in mio nome, e la prieghi per il desiderio, ch'io ho d'haver tutti I Ritratti de' Signori di Casa Gonzaga, a farmi haver il suo, siccome mi ha promesso [...] e affinché al mio ritorno

io lo trovi, la sarà contenta fare, che gli sia consignato fatto che sarà [...] Di Sabbioneta il dì 4. Di Gennajo 1556. [...] Vespasiano Gonzaga Colonna.》¹⁾(ナポリに出発する際に、我が秘書ムツィオ・カピルポにわたくしの名代としてマントヴァに赴き、貴殿[フェデリーコ・ゴンザーガ・ダ・ガッツォーロ]にゴンザーガ家一族のすべての肖像画を得たいというわたくしの願いをお伝えするようにと命じております。そして貴方様が以前、わたくしにお約束下さったように、貴殿ご所有の肖像画を頂いて参るようにと申しつけております。[...]ゆえにサッピオネータに戻った際、もし私がそれを見たならば、貴殿が我が秘書にお渡し下さったというそのご厚情を大変嬉しく思うことでしょう[...]サッピオネータより1556年1月4日[...]ヴェスパシアノ・ゴンザーガ・コロナ)。()内は拙訳、[]内は筆者による補足。

- (18) 大プリニウスの『博物誌』(第35巻2章6節)、ポリュビオスの『歴史』(第6巻53章)に共和制ローマの風習として記載されている⁵⁵⁾。
- (19) その後、木製騎馬像は1589年にドゥカーレ宮殿内の大広間に設置されることとなる¹⁵⁾。
- (20) 息子ルイージが1580年に夭折した後、ヴェスパシアノは、翌81年に親戚のグアスタッラ公爵チューザレ・ゴンザーガの長女マルゲリータ・ゴンザーガ(1562～1618)と三度目の結婚を行うが、二人の間に子どもは生まれず、最終的に長女イザベッラが全相続人となる(注5参照)。
- (21) 五賢帝および共和制ローマの英雄譚の主題特定は、L. Ventura (2009, p.256)がすでに行ったものに依拠している⁵³⁾。
- (22) 同時代文書記録には“Camera Magna Picta”(絵画の間)あるいは“camera depincta”(描かれた間)と記録されている。“Camera degli Sposi”の名は17世紀にCarlo Ridolfi (1648)によってはじめて使用された呼称である³⁹⁾。

文献

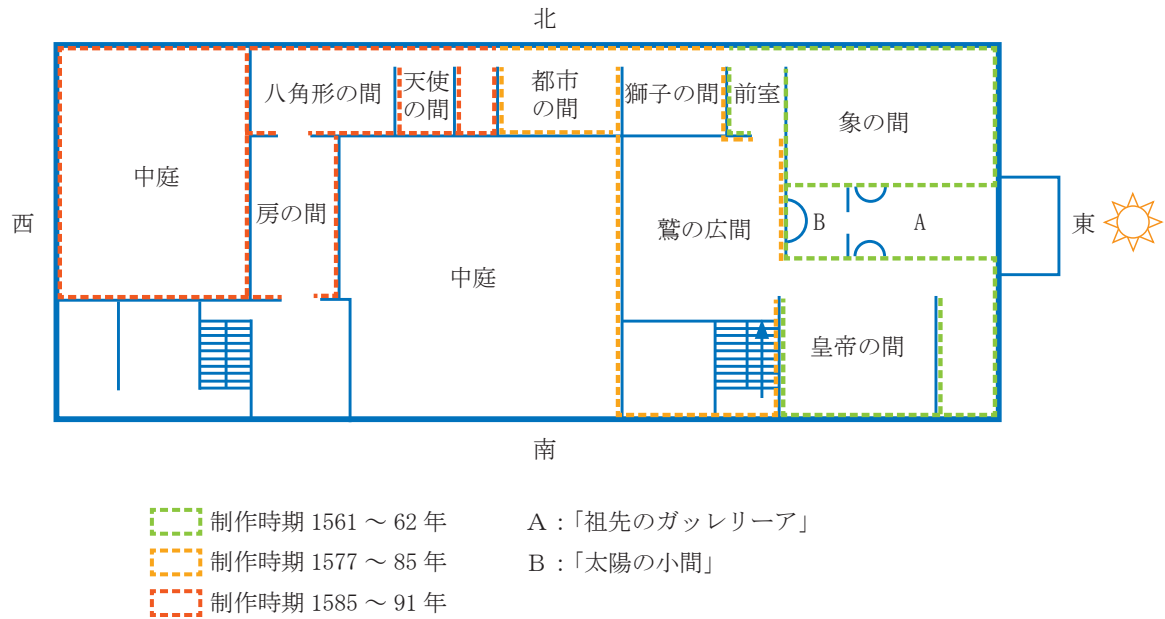
- 1) Affò, I.: Vita di Vespasiano Gonzaga Duca di Sabbioneta, e Trajetto, Marchese di Ostiano, Conte di Rodigo, Fondi ec. Presso Filippo Carmignani, Parma: p. 1 (出生), pp. 3-5 (叔母ジュリアの後見, エルコレ, フェッランテの摂政, ヴェスパシアノの人文主義教育), pp. 18-19 (四百人騎兵指揮官), p. 21 (軍事顧問とイタリア人歩兵隊長), p. 30 (小さなアテネ), p. 38 (グランデの称号), p. 43 (理想都市の建設), pp. 46 (レオーネ・レオーニ作ヴェスパシアノのブロンズ像), p. 49 (造幣局の監督官A・カヴァッリ), p. 57 (アンナ・ダラゴーナとの結婚), p. 59 (侯爵), p. 84 (ナバラ副王), p. 85 (バレンシア副王), p. 86 (帝国諸侯), p. 87 (公爵), pp. 91-92 (1556年1月4日のヴェスパシアノからフェデリーコ・ゴンザーガ宛ての手簡), p. 103 (金羊毛騎士団員), p. 104 (木彫騎馬像), pp. 115-116 (遺書), 1780
- 2) Amadei, F.: Cronaca Universale della città di Mantova Edizione integrale. vol. III. Amadei, G., Marani, E., Praticò, G. (eds.),

- C.I.T.E.M., Mantova: pp. 39-55 (esp. p. 42), 1956
- 3) Apollonio, F. I.: Il disegno di Sabbioneta. Rilievo urbano e immagine della città. Disegnarecon 1 (1): pp. 1-18, 2008 (ポーロニャ大学の電子雑誌Disegnareconを参照. <https://disegnarecon.unibo.it/article/view/655/622> 2017年1月1日(アクセス日))
- 4) Auer, A. von: Schloss Ambras und die Habsburger Portätgalerie. Vernissage Nr. 07/2000 8 Jahrgang 65 (Die Habsburger Portätgalerie. Kunsthistorisches Museum, Sammlungen Schloss Ambras): pp. 6-11, 1988
- 5) Avanzini, N.: Vespasiano Gonzaga. Dizionario biografico degli italiani vol. 57, 2001 (TreccaniのWeb版参照). http://www.treccani.it/enciclopedia/vespasiano-gonzaga_%28Dizionario-Biografico%29/ (2017年1月1日アクセス日)
- 6) Banham, J. (ed.): Encyclopedia of Interior Design. Volume 1. Fitzroy Dearborn Pub., London & Chicago: pp. 469-471, 1997
- 7) Barocchi, P. (ed.): Gli Uffizi. Quattro secoli di una galleria (Atti del Convegno internazionale di studi, Firenze 1982). Olschki, Firenze, 1983
- 8) Battisti, G., Alessio, G.: Dizionario Etimologico Italiano. G. Barbèra Editore, Firenze: p. 1752 (galleria), p. 2728 (palazzo), 1975
- 9) Bertelli, S. (Burr Litchfield, R. trans.): The king's body. Sacred rituals of power in medieval and early modern Europe. The Pennsylvania State University Press, Pennsylvania: p. 139, 2001
- 10) Carpeggiani, P.: Città reale e città ideale. l'evento di Sabbioneta. Cavallari, A. (ed.), Sabbioneta. Una stella e una pianura. Vallardi, Milano: pp. 25-64, 1985
- 11) Colorni, V.: Gli ebrei a Sabbioneta. Civiltà Mantovana n. s. 28-29: pp. 125-140, 1990
- 12) Cordaro, M.: La camera più bella camera del mondo. Cordaro, M. (ed.). Mantegna La Camera degli Sposi. Electa, Milano: pp. 11-26, 1992
- 13) D'Alberto, L.: Il Palazzo «Grande» o Ducale di Sabbioneta. Considerazioni relative al suo restauro. Corredate da un rilievo del monumento stesso. Civiltà Mantovana Anno V (Quaderno 25): pp. 1-29 (esp. 12), 1971
- 14) Denunzio, A. E.: Sulla "Libreria Piccola" di Vespasiano Gonzagae e sulla sorte delle collezioni sabbionetane. Sartori, G., Ventura, L. (eds.), Nonsolosabbioneta secondo. Ne&A Print, Villafranca di Verona: pp. 27-34, 2013
- 15) Devoto, G., Oli, G. C.: Dizionario della Lingua Italiana. Le Monnier, Firenze: p. 880 (galleria), p. 1442 (palazzo), 2002
- 16) Dondi, Nicolò de': Estratti del Diario delle cose avvenute in Sabbioneta dal MDLXXX al MDC. Müller, G. (ed.), Raccolta di cronisti e documenti storici lombardi inediti. vol. II. F. Colombo, Milano: pp. 313-464, esp. p. 338 (レオーニの彫刻), 1857
- 17) Faroldi, G.: Vita di Vespasiano Gonzaga Colonna duca di Sabbioneta, ca. 1592, ms. presso l'Accademia Virgiliana di Mantova [in Marani, E. (ed.), Sabbioneta e Vespasiano Gonzaga. Pro Loco, Sabbioneta: p. 55 (四百人騎兵指揮官, 軍事顧問, 伊人歩兵隊長), p. 57 (グランデ), pp. 68-72 (ナバラ副王, バレンシア副王), 1977]
- 18) Forster, K. W.: From "Rocca" to "Civitas". Urban Planning at Sabbioneta. L'Arte 2 (5), pp. 5-40 (esp. p. 5, 37 n. 2), 1969
- 19) Haag, S. (ed.): Schloss Ambras Innsbruck. Wien, Kunsthistorisches Museum Wien: pp. 52-61, 2013
- 20) Kantrowicz エルンスト・カントローヴィッチ (小林公訳): 王の二つの身体. 筑摩書房, 東京, 2003
- 21) Lenzi, N.: Sabbioneta "La piccola Atene". Edizioni 'Il Risveglio' Cassina de' Pecchi, Risveglio: p. 7, 1996
- 22) Lisca, A.: Vita Vespasiani Gonzagæ Sablonetæ Ducis etc. Veronæ. Apud Hieronymum Discipulum, 1592 [Campanini, G. (trad.), Editoriale Sometti, Mantova: p. 19 (四百人騎兵指揮官), pp. 25-26 (グランデの称号), p. 28 (ナバラ副王, バレンシア副王), 2002]
- 23) Livius リウィウス (毛利晶訳): ローマ建国以来の歴史. 京都大学学術出版会, 京都, 第二巻第十章 (ホラティウス・コクレス), 第二巻第十二章 (ガイウス・ムキウス・スカエウォ), 第三巻第二十章、二十九章 (ルキウス・クインクティウス・キンキナトゥス), 第七巻第六章 (メッティウス・クルティウス), 2008
- 24) Luzio, A.: La Galleria dei Gonzaga venduta all'Inghilterra nel 1627-28. Casa Editrice L. F. Cogliati, Milano, 1913.
- 25) Marani, E. & Perina, C. T.: Mantova: Le Arti. vol. III. Istituto Carlo D'Arco per la Storia di Mantova, Mantova: p. 123 (ヴェスパシアーノの出生, サッピオネータの都市建設事業), pp. 401-403 (パラッツォ・ドゥカーレ建設と「祖先のガッレリア」の造営), 1965
- 26) Marani, E., Amadei, G.: I ritratti gonzagheschi della collezione di Ambras. Banca Agricola Mantovana, Mantova, 1978
- 27) Marten, B.: Un astrolabio della collezione di Vespasiano Gonzaga. Sartori, G., Ventura, L. (eds.), Nonsolosabbioneta secondo. Ne&A Print, Villafranca di Verona: pp. 21-26 (esp. p. 24), 2013
- 28) Minagawa 皆川卓: イタリアが外国に支配されるとき—近世の「帝国イタリア」とその変容—. 服部良久 編著, コミュニケーションから読む中近世ヨーロッパ史. ミネルヴァ書房, 京都, pp. 268-291, 2015
- 29) Mizuno 水野千依: イメージの地層. 名古屋大学出版会, 名古屋: pp. 247, 261-262, 2011
- 30) Mochizuki 望月由美子: 16世紀のイタリア都市国家マントヴァにおけるパラッツォ・デル・テ建設の意味. 千葉大学大学院文学研究科,

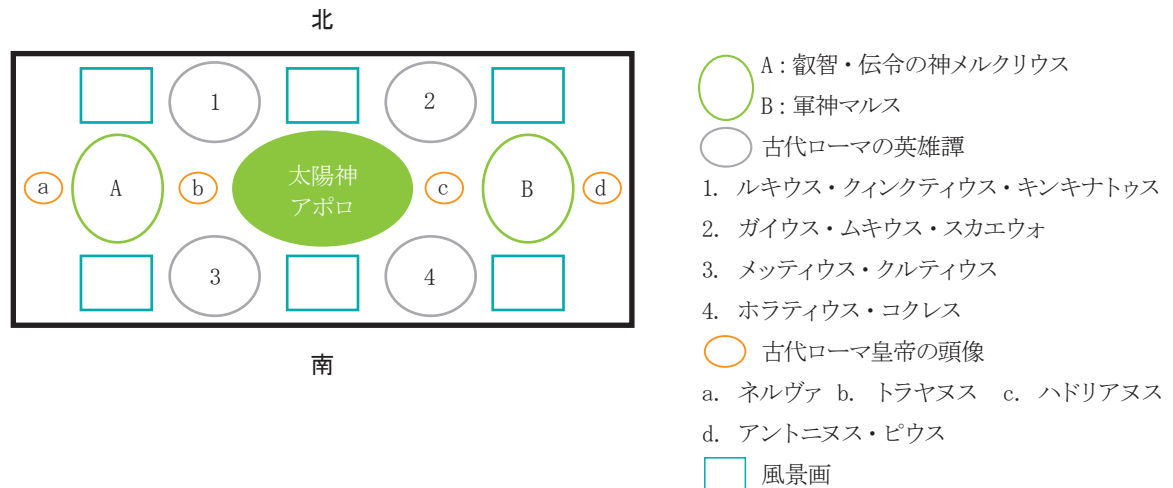
- 未出版：p. 30, 1997
- 31) Mochizuki 望月由美子：ゴンザーガ家君主の寝室（1444-1540）に関する政治的表象の研究．千葉大学大学院社会文化科学研究所（博士論文），未出版：pp. 117-192, 2005
 - 32) Mochizuki 望月由美子：イタリア・ルネサンス絵画におけるユダヤ表象—マントヴァの宮廷画家アンドレア・マンテーニャの絵画を事例研究に—．SCU Journal vol. 10, n. 1: pp. 3-17, 2016
 - 33) Mochizuki 望月由美子（口頭発表資料）：サッビオネータ公爵ヴェスパシアーノ・ゴンザーガ・コロナの肖像分析—16世紀後半のスペイン・ハプスブルク宮廷と北イタリアの文化交渉—．第46回ルネサンス研究会（2016年7月2日 於：学習院女子大学），配布資料，2016
 - 34) Mochizuki 望月由美子：アントニス・モル・ファン・ダスホルスト作《ヴェスパシアーノ・ゴンザーガ・コロナの肖像》．日伊文化研究第55号：脚注（2），（3），2017（掲載予定）
 - 35) Petracco, F.: I soffitti lignei di Palazzo Ducale. Sartori, G., Ventura, L. (eds.), Nonsolosabbioneta secondo. Villafranca di Verona, Ne&A Print: pp. 93-120, 2013
 - 36) Piper, J.: Pienza. Edition Axel Menges, Stuttgart-London, 2000
 - 37) Piper, J.: Sabbioneta. La genesi geometrica della città ideale. Sartori, G., Ventura, L. (ed.), Nonsolosabbioneta. Ne&A Print, Villafranca di Verona: pp. 62-68, 2013
 - 38) Prinz, W.: Galleria. Storai e tipologia di uno spazio architettonico. C. Cieri Via (ed.), Franco Cosimo Panini, Modena, pp. 54-57, 2006
 - 39) Ridolfi, C.: La meraviglie dell' arte ovvero le vite de gl' illustri pittori veneti, e dello Stato. Gio. Battista Sgauri, Venezia: p. 70, 1648
 - 40) Rodella, G.: Note sul Castello di San Giorgio e l'architettura della Camera picta. Cordaro, M. (ed.), Mantegna La Camera degli Sposi. Electa, Milano: pp. 225-226, 1992
 - 41) Roggeri, R. & Ventura, L. (eds.): I Gonzaga delle nebbie. Storia di una dinastia cadetta nelle tra Oglio e Po. Silvana Editoriale, Milano, 2008
 - 42) Romano, G.: Sul significato di alcuni fenomeni solari che si manifestano nella cappella di Giotto a Padova. Ateneo veneto N. S. 29: pp. 213-256, 1991
 - 43) Romano, G.: Archeoastronomia italiana. CLEUP, Padova: pp. 57-67, 1992
 - 44) Sartori, G.: Sabbioneta Illustrissima. La memoria ritrovata. Arti Grafiche Castello, Viadana: pp. 19-22, 2005
 - 45) Sartori, G.: Sabbioneta. La Nuova Roma. Arti Grafiche Castello, Viadana: pp. 31-35, 2006
 - 46) Sartori, G.: Sabbioneta, dall'antico borgo medievale alla NOVA CIVITAS. Vitelliana 10: pp. 27-40, 2015
 - 47) Semeghini, C.: Sabbioneta. Guida storico-artistica. A Passo d' Uomo, Sabbioneta: p. 2（エトルリア起源），pp. 4-6（中世の支配者），pp. 6-7（ゴンザーガ家支配の始まり），2002
 - 48) Signorini, R.: Aenigmata "Disegni d' arme e d'amore" ossia imprese e motti su medaglie e monete di principi Gonzaga e di tre pesonaggi coevi. Malacarne, G., Signorini, R. (ed.), Monete e medaglie di Mantova e dei Gonzaga dal XII al XIX secolo. Electa, Milano: p. 41, 1996
 - 49) Tavolaro, A.: l sole architetto a Castel del Monte, Mario Adda Editore, Bari, 1984
 - 50) Tuttaitalia.it: Indici demografici e Struttura di Sabbioneta（イタリア政府中央統計局 ISTAT のデータに基づくサッビオネータの人口統計指数と構成），2016 <http://www.tuttaitalia.it/lombardia/92-sabbioneta/statistiche/indici-demografici-struttura-popolazione/> 2016年3月22日（アクセス日）
 - 51) Ventura, L. (ed.), Vespasiano Gonzaga Colonna 1531-1591. Mostra iconografica nel quarto centenario della morte. Il Bulino, Modena: pp. 23-25（祖先のギャラリーア），pp. 60-109（アルベルト・カヴァッリ作肖像レリーフの図版説明），1991
 - 52) Ventura, L.: Il ritratto a corte. Vespasiano Gonzaga, l'autoconoscenza ed il collezionismo. Ventura, L. (ed.), Vespasiano Gonzaga Colonna 1531-1591. Mostra iconografica nel quarto centenario della morte. Il Bulino, Modena: pp. 9-30（esp. pp. 24-25），1991
 - 53) Ventura, L.: "Per il desiderio d'haver tutti i ritratti de' signori di casa Gonzaga". Il ritratto del principe nelle corti gonzagheschi tra Oglio e Po. Roggeri, R., Ventura, L. (eds.), I Gonzaga delle nebbie, Silvana Editoriale, Milano: pp. 53-65（esp. p. 59），2008
 - 54) Ventura, L.: Sabbioneta Quanta fuit. Una capitale padana tra "antico" e "maniera". Fiorino, M. T., Terraroli, V. (ed.), Lombardia manierista. Arti e architettura 1535-1600. Skira, Milano-Ginevra: pp. 253-273（esp. pp. 253, 256, 258, 272, nota 10），2009
 - 55) Vlad Borrelli, L.: Imagines maiorum. Enciclopedia dell'arte antica, 1961（TreccaniのWeb版参照）. [http://www.treccani.it/enciclopedia/imagines-maiorum_\(Enciclopedia-dell'Arte-Antica\)/](http://www.treccani.it/enciclopedia/imagines-maiorum_(Enciclopedia-dell'Arte-Antica)/) 2016年10月28日（アクセス日）
 - 56) Woodall, J.: 'His Majesty' s most majestic room'. The division of sovereign identity in Philip II of Spain' s lost portrait gallery at El Pardo. Nederlands Kunsthistorisch jaarboek 46: pp. 52-103, 1995

文末資料

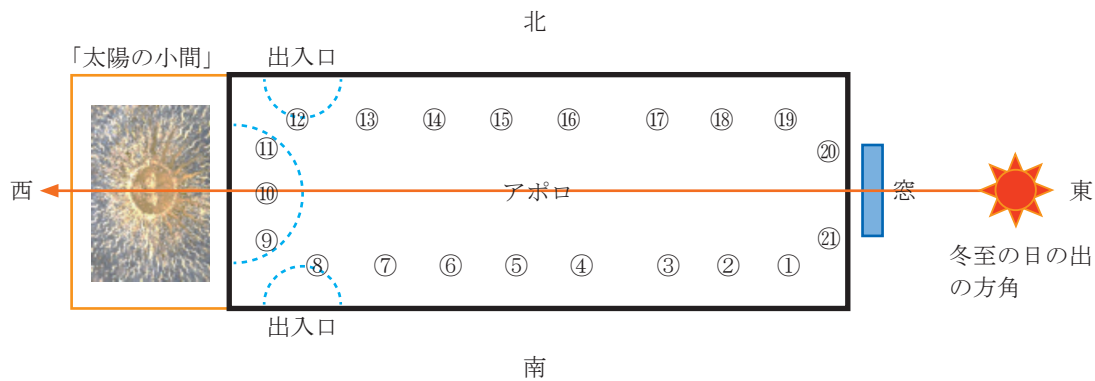
資料1 パラッツォ・ドゥカーレ2階の平面プラン（執筆者による作成）



資料3 天井画の装飾プログラム図式（執筆者による作成）



資料2「祖先のガッレリア」の肖像プログラム（執筆者による作成）



< 21体の肖像レリーフ >

- ①初代カピターノ，ルイージ
（ゴンザーガ家の初代当主）
- ②ルイージの妻リキルダ・ランベルティ
- ③第二代カピターノ，グイド
- ④グイドの妻ヴィリダ・ベッカーリア
- ⑤第三代カピターノ，ルドヴィーコ一世
- ⑥ルドヴィーコ一世の妻アルダ・デステ
- ⑦第四代カピターノ，フランチェスコ一世
- ⑧フランチェスコ一世の妻マルゲリータ・マラテスタ
- ⑨第五代カピターノ，初代マントヴァ侯爵
ジャンフランチェスコ
- ⑩ジャンフランチェスコの妻パオラ・マラテスタ
- ⑪第二代マントヴァ侯爵ルドヴィーコ二世

- ⑫ルドヴィーコ二世の妻バルバラ・フォン・
ブランデンブルク
- ⑬初代サッビオネータ伯ジャンフランチェスコ
（ルドヴィーコ二世の三男，サッビオネータ
分家の祖）
- ⑭ジャンフランチェスコの妻アントニア・
デル・バルツォ
- ⑮第二代サッビオネータ伯ルドヴィーコ
- ⑯ルドヴィーコの妻フランチェスカ・フィエスキ
- ⑰第三代サッビオネータ伯ルイージ
- ⑱ルイージの妻イザベッラ・コロナ
- ⑲第四代サッビオネータ伯，初代サッビオネータ
公爵ヴェスパシアーノ
- ⑳ヴェスパシアーノの妻アンナ・ダラゴーナ
- ㉑ヴェスパシアーノの嫡子ルイージ



① ② ③ ④



⑨ ⑩ ⑪ ⑫



⑰ ⑱ ⑲ ⑳



⑤ ⑥ ⑦ ⑧



⑬ ⑭ ⑮ ⑯



㉑